

日刊建設工業新聞 2009年12月25日

淀川改修100年

川づくり、まちづくりそして近畿の元気を淀川から発信

淀川大改修成し遂げた先人たちの偉業に感謝



(おさわ・たかし) 84年京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修了。2月23日付で河川局河川計画課河川計画調整室長から現職に。京都市出身。

国土交通省近畿地方整備局
河川部長 尾澤 卓思氏



(なかむら・ふみ) 神戸女学院大学卒。新しいシャンソンを中心に、世界のポップスやジャズなどジャンルを問わず歌うグローバル歌手として活躍中。

シャンソンシンガー
中村 扶実さん

「尾澤氏」流域全体で川のデザインを

音楽を通して川の大切さを「中村氏」



大橋 房太郎 (おおはし・ふさたろう、1860~1935年)。大阪府出身の政治家。淀川の治水に一生を捧げ、治水翁と呼ばれた。私財をなげうって淀川改修に尽力した。葬儀は大阪市葬で大阪中央公会堂で行われた。

1909年の淀川改良工事の完了から今年で100周年を迎えた。そして今。環境に対する関心の高まりから、頂土嚢保全や景観対策など新たなニーズが発生している。淀川の大改修に人生をささげた大橋房太郎さんのひ孫であるシャンソン歌手の中村扶実さんを迎え、尾澤

卓思近畿地方整備局河川部長と淀川改良の歴史を振りかってもらい、これが毎錮州口ゴりなだについて語り合ってもらった。

尾澤 淀川は、今年で改良工事 100 年を迎えます。苦から洪水に悩まされてきました。大昔は大阪には河内潟と呼ばれた大きな入り江がありました。そこに淀川が運んでくる土砂で平野ができ、町ができて発展してきました。

低平地で洪水氾らんにより被害が多発していましたが、近代的な改修が始まったのは明治になってからです。オランダからデレーケなど様々な技師を招き、西洋技術を駆使して低水路工事から河川改修が始まりました。

洪水対策の「番のきっかけが 1885 年の洪水です。枚方の淀川左岸で堤防が決壊し、水が押し寄せたあと、追い討ちをかけるように台風により洪水が再び起こり、大和川の堤防付近にまで浸水域が広がる大惨事になりました。これを機に淀川の改修機運が一気に盛り上がり、89、96 年と度重なる洪水で政府が動きました。

このころは、近代国家として法治国家の基礎を築いていた時で、法律をつくり、それに基づいて河川事業をすることが必要となっていました。淀川においても用地を買うといった行為で私権に制限を加える必要があります。そこで 96 年、河川法の誕生となりました。

このとき、本来なら河川法の議論には時間がかかりますが、数時間で河川法の審議を終え、すぐに次の淀川の改修改良計画の審議が始められ、認められることになったのです。当時の河川法は淀川のためにあったと言われるぐらい、淀川の改修が急務だったと言えます。

下流では、中津川のところに新しい放水路をつくり、大川も神崎川も分離しました。これによって寝屋川流域や安威川流域の低平地で洪水被害が減少し、水田開発ができるようになったのです。

中流では、三川合流部の桂川を少し下流につけ替えたり、巨椋池を分離したりしましたし、上流では、画期的な取り組みとして、南郷に洗堰を設け、瀬田川改修と琵琶湖から水利用を進めました。

上流、中流、下流と、適切な措置を考えた流観全体の計画を立てたことに、沖野忠雄さんから諸先輩たちの偉大さを感じます。

淀川改修には、もう 1 人忘れてはならない人がいます。大橋房太郎さんです。当時、日清戦争や日露戦争など戦争があった時代で、社会資本整備に回す費用など難しい時代だったと思います。そこを、命が重要だと訴え、大阪の発展を本気になって考え、淀川改修を実現しました。大阪の命の恩人だと言っても過言ではありません。

中村さんにとって曾祖父にあたられる方ですが、どんな方だったのでしょうか。

中村 実は房太郎の息子の治房も、府会議員を 35 年務めまして、治水二代と言われ、南郷洗堰の自動化や天ヶ瀬ダム建設に尽力しました。私は祖父と暮らしていましたので、家の中では治水の話をよく聞かされました。

その申での房太郎の話はこうです。身長は 145 センチしかなく、男性としては非常に小柄で一度言い出したらあきらめない頑固な人でした。

広教小学校にあった法律学校で裁判官になる為に勉強していましたが、学校が廃止されることになり、のち外交官や外務大臣にもなった小村寿太郎が先生であったので、友人である鳩山和夫底の所に房太郎は訪ねていくのです。

当然、断られますよね。そうしたら、どうしようと言いながら、何日もその前で待っていたらしいです。すると、偶然知り合いの人が来て紹介していただき書生にしてもらったのです。何か幸運を持っている人だとは思いますが、そこで裁判官になるべく勉強をしているうちに、1885 年の洪水を知るのです。普通であれば、そのままいるところが大阪がとても好きなんでしょうね。大阪の惨状を見て、裁判官をあきらめて、淀川のために一生かけることを決めたのです。25 歳のときでした。

尾澤 裁判官という高い理想があって、鳩山きんの家の前で何日も待っているぐらいの人が裁判官の道券すばっとあきらめられたのは、本当にすごいですね。

中村 チャンスを全部捨てて、淀川のためにやろうと普通思えるかなって。それが私には疑問というか、選ばれた人だったと思います。大阪に戻った房太郎は米屋を治めましたが、「あそこへ行ったら淀川の話ばかりされる。あそこは淀川塵や」と言われる位の熱心さでした。

最後には、関東大震災後に内務大臣兼帝都復興院総裁として東京の都市復興計画を立案した後藤新平さんに治水翁という名前をいただきました。その時「房太郎さん、僕はこの字を書くために水を浴びて、身を清めて書かせていただきました」と言って下さったそうです。すごく心がこもっているっていうか、人間として律している人たちが生きていた時代だったのでしょうか。国をよくするぞという気持ちが生きていた時代だったから、田舎者の房太郎でも願いが聞き届けられ、淀川の大改修を成し遂げられたのだと思います。

尾澤 ゼロもしくはマイナスからでもやれるという、エネルギーが出せる時代だったと思います。

中村 小作人の人たちが「この大根の売り上げを淀川に使ってください」と大根を持ってこられ、大橋大根と名づけられたというエピソードがあります。そういう生活に困るような人々から政府高官まで国中の人々が日本を良くしたいというパワーがみなぎって心た時代であったのを知ってとても感動しました。

尾澤 大きな可能性を信じていたのですが、今の若い人にそういう人たちが生きた時代の雰囲気を感じ取ってほしいと思います P 今はすごく窮屈な思いや閉塞感が漂っています。そんな時代ではなかなかいい仕事はできないですよ。

中村 大阪は個人の力で発達してきた町ですよ。中央公会堂も淀屋橋なども個人がつくった歴史があります 個人の積み重ねの文化を持つ大阪が、今の時代も個人の力が発揮できる街であってほしいです。

尾澤 効率中心で物を見ると、同じ価値観でものを見て、即効性がないとだめとなります。

先を見て、遠回りをして、大きなことをなし遂げるといふ選択肢がなくなるのです。大きな達成感を持てるような仕事ができなくなるのではないかと心配になります。

土木を志してきた人間は、何かしら大きな仕事してみたいなというのがあって土木の世界を進んできましたしね。

中村 すばらしいですね。房太郎は白のスーツを着ていましたが、その当時、真っ白な服を看ている人なんていないですよ。それで、ハガキ大の名刺を出すわけですから、少し引きますよね。

その上、土下座や裸踊りまで淀川のためならなんでもしたということです。

房太郎は財産をすべてなげうち淀川の改修に尽力したため、晩年は人にお世話にならないと生活できない状態でした。あばら家に住み「あのまま裁判官になってたら今ごろは暖かいうちで住めたやろうし、あのときに川で足滑らして死んだら楽やったんちゃうかな」などと絶望的な気持ちになって夜中にパッと目が覚める時もあったそうです。

「いやいや、淀川をきちんとできてほんまに僕の人生はよかったんや」と思っ、もう一度寝直したらしいです。

尾澤 房太郎さんのおかげもあって、これだけ安心して暮らせる大阪に発展してきたわけですが、地球温暖化による気候変化など、今後いろいろなことが起こる可能性があります。大阪はゼロメートル地帯に人と資産が集積しており、ひとたび大洪水が発生すると大変な被害を受けます。一方では、大阪の活力でもって、汚かった道頓堀が生まれ変わり、今、活気が戻ってきています。

これからの100年は、今の世代とこれからの世代でつくっていかねばなりません。

我々としても、川から近畿の元気を取り戻したいと考えています。このため、川と社会がどのようにかかわっているのかを改めて見てみよう、近親地方整備局と近畿の2府5県、水資源機構関西支社の川の技術者グループが集まり、「近畿を元気にする川からのにぎわい近畿」というものをまとめました。水災害・土砂災害、地球温暖化、地域の魅力・活力、自然環境という四つの観点から広く川と社会のかかわりを考えました。

川の技術者は、建設整備という観点から、これだけ整備が進みましたという目で見がちです。本当に重要なのは、その整備によって社会がどう変わったかであって、我々もそこへ目を向けなければなりません。

中村 私はたまたま房太郎のひ孫で生まれましたが、本家の一人っ子でした。跡継ぎがいなかったので、私の息子が4代目になっています。淀川改修100周年を契機に房太郎のことを広め、大阪を育んできた淀川を讃える気持ちで「MIO 渾～水郡物語」という歌を作りました。私は音楽を通して淀川を、そして大阪を感じてもらいたい。川をみんな体験していきたい。私にできる活動をしていきたいと思っています。

尾澤 文化というところから、川を応援していただけるのは本当にありがたいですね。歌には心に響くものがあり、歌を通じて川を意識してもらうことによって、川に対する愛

護の気持ち芽生え、川の恩恵で生活をしていることを認識してもらえれば、うれしく思います。

中村 吉本や道頓堀とは違った、中之島を中心としたモダンな大阪があることを発信したかったので、曲を交響詩にしてクラシック音楽にしました。

尾澤 大阪にとって中之島と道頓堀に、それぞれの良さがあることが相乗効果となって良いと思います。

中村 川って永遠に続くものですが、洪水もあれば静かなときもある。川というのはそこに住む人間にとってとても大切ですよね。国土交通省さんたちが、守って下さっているからこそ、幸せな生活をおくれていると思います。ダムの話などが話題になっていますが、川を守る仕事をする方がいるからこそ、今の生活があることをもっと認識すべきだと思います。

尾澤 川は、良いときもあれば大変なときもあります。それをよく知ってつき合うことが重要です。このため、きちんと情報を皆さんに提供しなければなりません。

今後、心配なのは、地球温暖化の影響によって大きな洪水や渇水が起こる頻度の増加が予想されていることです。30年後ぐらいからその兆候が出てくるようなシミュレーション結果があります。今からそれを意識して、まちづくりとして体質改善を図る必要があると思っています。今までと同じ体質では乗り切れません。特にゲリラ豪雨と呼ばれる局地的な大雨に対しては、都市構造として、対処できるに至っていません。体質改善するためには、まず何が起こるかについて勉強しなければなりません。今、検討会をつくる準備をしており、学識経験者の意見を聞きながら、まとめてみたいと思っています。それがはっきりすると、次にどんな安全を確保するか目標を定めて、具体的な対応の議論に入っていくと思っています。

重要なのは、川だけでなく、流域全体の中でいろいろなことを考えていくことです。

どんなところにどういうリスクがあるかをきちんと示せる指標を用いて、こんなことが起こるからこままでの安全を確保する必要があるということを見せていかなければならないと思っています。

中村 まずはみんなの意識が「川って大切だな。自分達も大切にしなければならぬ」という意識をどうして持ってもらうかですね。私は音楽を通して川のすばらしさを訴えていきたいと思っています。

尾澤 川のことをこれだけ思っていて、文化面からアプローチしていただくと、今までにない、いろいろなコラボレーションが生まれると思います。それによって仲間もどんどん増える。これはすごく大切です。いろいろな万々が川の応援団になっていただいで、川を愛していただけるとうれしい限りです。

我々だけでももの考えてもダメだと思います。みんなが考えたことをできるだけうまく盛り込んだ州のデザインを描きたいですね。文化があり、歴史もあり、いろんな要素があるトータルとしての社会や流域の中での川づくり。大阪が豊かであることが、淀川も豊か

になる。元気、にぎわいに向けて一緒に頑張りたいと思います。

中村 よろしく願いいたします。ぜひ、尾澤さんには房太郎のような人になっていただきたい。

尾澤 私もそれぐらいの気概を持ってやらなければならないと思います。ありがとうございました。